二〇一一年六月二三日（室生寺 参加者二二名）

水分の宮は常濡れ杉落葉　菜々
夏木立女人高野の磴こごし　〃
夕映えて線刻涼し磨崖仏　〃
滝壺に吸い込まれさう音激し　つくし
大欅跡と碑身にぞ入む　〃
国宝の堂深閑と杉涼し　〃
高舞へる蛍に聳ゆ杉襖　うつぎ
万緑の森深閑と思惟仏　〃
磨崖仏涼し早瀬の楽もまた　〃
涼風の通ふ吉野の杉木立　わかば
資料館開けし一歩に黴匂ふ　〃
塔朱し女人高野の万緑裡　かれん
老鶯の声高まりて句座佳境　〃
サングラスかけてこれより吟行子　きづな
鎧坂汗ぬぐひつつ塔仰ぐ　〃
堂縁の下に栄える蟻地獄　なつき
竹箒そばに置かれし蟻地獄　〃
み吉野の涼し杉の秀妍競ふ　明日香
若楓天蓋なせる磴登る　〃
国宝の仏在します堂涼し　三刀
鉾杉の天辺さして恋蛍　〃
室生寺の急磴のぼる薄暑かな　よし女
遙拝す磨崖弥勒に川涼し　〃
万緑が荘厳したる磨崖仏　ひかり
堂縁に憩へと揺らぐ若楓　有香
青嵐塔の九輪の傾ぐかと　よし子
ご神木涼しと耳をあててみる　百合
三川の落ち合ふところ渦涼し　ぽんこ
若葉映ゆ天誅義士の辞世碑に　満天
塔仰ぐ女人高野の青嶺濃し　小袖

二〇一一年六月二三日（天好園早朝句会 参加者二二名）

めまとひに推敲の絲切られけり　よし女
雨なれど朝の老鶯機嫌よし　〃
雨もまたよしと吉野の朝河鹿　〃
青畝碑の傘となりたる山法師　〃
梅雨寒や隅に陣なす池の鯉　ひかり
老鶯の声深吉野の遠近に　〃
豆粒のでで虫の角触れてみる　〃
朝涼や吉野の宿に句碑あまた　〃
夏霧の吉野の深山朝散歩　すみえ
囀りに眠気とばさる朝散歩　〃

昨夜の雨やみて深吉野みどり濃し　菜々
峡の宿目覚めは庭の蛙笛　〃
見晴るかす四方の山々夏霞　百合
万緑に囲まれ小さき祠かな　〃
梅雨の川岩に砕けて高鳴れり　小袖
五月雨の苔むす石の苑めぐり　〃
夏霧をかづきて朝の吉野山　よし子
梅雨の雲切れて主峰の現れにけり　〃
東雲の夏霧に現る杉美林　うつぎ
河鹿宿しるき瀬音に目覚めけり　〃
さしのばす手にみ吉野の姫蛍　せいじ
吟行子緑雨の庭をたもとほり　〃
流れへと白き空木の花明かり　明日香
童心に帰る蛍のひと夜かな　〃
夏霧の流る吉野の杉美林　わかば
万緑の中に激つ瀬響きけり　〃
ぼんぼりの一つ破れて梅雨じめり　なつき
かたつぶり橋の欄干朝散歩　とし子
夏山のてっぺん雨に煙りけり　こすもす
めまとひを払ひ払ひて朝散歩　きづな
夏霧の稜線幾重墨絵めく　満天

大梁に手斧のあとや梅雨の宿　かれん
山法師真下の句碑を濡らさざる　有香
夏落葉はらりはらりと句碑の上に　三刀
夏霧のトンネルを縫ふ早瀬かな　つくし
雨粒の朝日に光る蜘蛛の糸　ぽんこ

二〇一一年六月二二日（投石の滝参加者二三名）

滝しぶく句碑も籬も苔むして　うつぎ
滝壺を出て磊々の瀬となんぬ　〃
この滝にしては小さき不動尊　〃
樹幹縫ふ夏霧迅し杉美林　〃
黎明や一山つつむ夏の霧　満天
緑陰に前垂れ赤き地蔵尊　〃
梅雨寒し目鼻欠けたる道祖神　〃
滝風にはらはらと散る谿の木々　〃
避暑の朝杉の美林へ深呼吸　きづな
山宿に句会重ねて明易し　〃
大欅切り株包み草茂る　〃
滝壺へ石投げてみんかと思ふ　〃
杉美林抜けて夏日の燦々と　百合
万緑の何処に佇ちても沢の音　〃
滴りて岩肌の草瑞々し　〃

若楓川霧に枝重ねけり　ぽんこ
滝壺の不動常濡れ避けられず　〃
滝風や羊歯群落の揺れやまず　〃
千年杉滝の真上に枝翳す　かれん
昨夜雨に太りし滝の勢と見たり　〃
木洩日のライトアップや滝しぶく　〃
白銀の日矢の射し込む夏木立　三刀
滝壺に逆巻く風の見えにけり　〃
夏霧の晴れて深山の襞深し　〃
神杉の諸枝に光る滝しぶき　菜々
杣道具奉りて小さき黴祠　〃
岩走る丹生の玉水みどりさす　〃
佇めば服湿り来る滝しぶき　すみえ
枝広げお日様透かす若楓　〃
吉野杉涼し真っ直ぐに林立す　〃
杣道具吊す山祇青葉風　小袖
家苞に吉野箸買ふ避暑の旅　〃
滝飛沫水雲となり万象へ　わかば
堂の屋根滴々と落つ滝飛沫　〃
滝の水一息入れて瀬に向かふ　せいじ
石垣の乾く間もなし滝社　〃

梅雨晴間窓全開す句座愉し　ひかり
杉木立縫ふて滝道九十九折　〃
滝の道辞さむ別れの深呼吸　なつき
滝宮の石燈欠けて苔むせり　〃
滝しぶき句帳の文字の滲みけり　よし女
木の間隠れに白銀の一瀑布　〃
大杉にかかる蜘蛛の囲破れなし　明日香
万緑の山また山や奥吉野　よし子
梅雨の滝岩なでまはし落ちにけり　とし子
石ベンチ乾く間のなし梅雨の滝　こすもす
夏霧の静かに川面なでてゆく　有香

二〇一一年六月二一日（丹生川上神社参加者二三名）

ついついと人恋ひ蛍荘の灯へ　菜々
杉箸の香る吉野の夏料理　〃
翠嵐に現れて白妙神の滝　〃
暮れかぬる空へ雪白山法師　〃
旅の膳鯉の洗ひを花と盛る　〃
足元の心もとなし蛍追ふ　よし子
小流れに星とちらばる草蛍　〃
尾のはねて吉野育ちの鮎料理　〃
万緑をまたぐ吊橋揺れやまず　〃

爺婆の石苔むして梅雨じめり　〃
滴りの真珠つなぎや苔の先　うつぎ
吊り橋の涼し激つ瀬眼下とす　〃
日射すとき虹現るる神の滝　〃
万緑の丹生の真名井に嗽ぐ　〃
沢音に和して蛍の明滅す　三刀
深吉野の空へ孤高の蛍かな　〃
笹百合や千年杉を打ち仰ぎ　〃
滝の威に押され誰もが無口なる　〃
三川の落合ふところ滝激つ　かれん
黄昏になほ白々と山法師　〃
深吉野の丹の吊橋や万緑裡　〃
水神のほこらは深き梅雨の奥　小袖
深吉野の瀑布真白にたぎちをり　〃
草蛍きらり水辺の遠近に　〃
蛍見て旅の心の深まりぬ　つくし
下闇に横たはる枝蛇のごと　〃
四囲の山雲脱ぎそめし梅雨晴れ間　せいじ
山の香の満つる川辺や河鹿なく　〃
木下闇抜けて丹生の瀬滔々と　わかば
吊橋を渡り再び木下闇　〃

更けてより始まる句座や河鹿鳴く　よし女
水神のお告げと拾ふ落し文　〃
宿庭の蛍火われを歓迎す　有香
深閑と千年杉の宮涼し　〃
神の滝しぶき洗礼享くるごと　満天
万緑を朱の吊橋が繋ぎけり　〃
神の滝ミストとなりてしぶきけり　こすもす
歩むたび腐葉土匂ふ山涼し　すみえ
岨の道辿ればしぶく神の滝　ぽんこ
あっぱっぱに着替へて旅の夕句会　きづな
葉隠れに忍者めきたる蛍かな　百合
神滝のしぶきにしぶき虹生まる　明日香

二〇一一年六月二一日（天誅組終焉地・石鼎庵参加者二二名）

万緑にすがりつくごと過疎の村　明日香
いくつもの白き渦巻き出水川　〃
ものぐさやただ待つだけの蟻地獄　〃
万緑や触るるばかりに列車行く　〃
蟻地獄小さき御堂を守るごと　有香
激つ瀬の同音異語や出水川　〃
万緑の底ひを進むバスの旅　〃
滝音を運びきたりし風涼し　〃

老杉の樹齢千年木下闇　よし子
流木の岩に抱きつく出水川　〃
満目の青葉に埋まる義士の墓　〃
深山よりつと現れし梅雨の蝶　小袖
梅雨出水岩に砕けて響きけり　〃
廃校の梅雨黴久し長廊下　〃
蛍保護札立つ川の涼しかり　ひかり
な滑りそ苔むす梅雨の石橋に　〃
終焉の遺詠の歌碑は下闇に　〃
梅雨の傘たたみて墓の義士悼む　なつき
赤やかん石に置かれし山清水　〃
身を任せ草を離れぬ梅雨の蝶　〃
衣魚深き行灯和紙や石鼎庵　よし女
全開す石鼎庵の句座涼し　〃
石鼎庵三和土に揃ふ梅雨の靴　〃
白き泡盛り上がりをる川涼し　とし子
斯く大いなる屏風岩苔涼し　〃
石橋をふみしめゆけば苔涼し　〃
天誅組忍びし歌碑は梅雨しとど　菜々
でこぼこの三和土涼しき石鼎庵　〃
静けさや鳥語しきりの里若葉　わかば

夏霧の深吉野の山泰然と　〃
杉美林縫ふ深吉野の瀬の涼し　こすもす
廃校の校庭の隅梅みのる　〃
夏蝶の訪ひくる女流句碑の前　三刀
黄鶺の声の洩れ来る杉木立　〃
目を閉じて聴く激つ瀬の音涼し　百合
降りるべき駅間違ひし大暑かな　〃
川とんぼ激ちし宇陀の瀬にあそぶ　うつぎ
びっしりと十薬咲かせ薬師堂　〃
蟻地獄取り囲みたる吟行子　すみえ
風薫る名だたる吉野杉の里　〃
大杉は苔をまとひて滴りぬ　きづな
三光鳥杉の美林に鳴きわたり　〃
農機具の保存学舎に黴匂ふ　満天
大岩にぶつかるごとく梅雨出水　ぽんこ
梅雨晴間苔の軒先より雫　せいじ
肌理荒き庵の三和土も梅雨じめり　かれん

吟行句会みのる選

二〇一一年六月二二日（室生寺 参加者二二名）